

カナダ、アルバータ州のファースト・ネーションによる 伝統文化再生への挑戦——カジノと文化復興

鎌田 遵

This paper analyzes the social and political dynamics of the gaming industry on Indigenous reserves in Canada in comparison with the growing casino business on the tribal reservations in the United States. Building on the existing literature on Indian casinos mainly in the context of the US cases, this paper articulates the intersection of the economic impacts of gaming business on the First Nation reserves and the settler-settler colonial history and geography in North America.

Because of the isolation and geographical remoteness of Canadian Indigenous communities, they have faced serious issues in terms of attracting visitors and bringing profits. That said, I would argue that the casino industry has still created the economic opportunities, accomplishing the recovery of Indigenous cultural identities and prides. While there is an argument that casino business contradicts with the Indigenous traditions, the communities have explored the possibilities of their economic and cultural survival.

I have utilized local newspaper articles, First Nations' websites, ethnographic fieldnotes and interviews in addition to various secondary sources in the fields of history, sociology, law, and geography.

はじめに

アメリカ合衆国（以下 アメリカ）では、これまで虐殺や弾圧、同化政策を乗り越え、差別や貧困に喘いでいた多くの先住民部族が、部族自治権を行使して、居留地 (reservation) に賭博場 (カジノ) を誘致し、莫大な利益を作り出してきた。その収益の一部は、居留地のインフラの整備や住宅事情を含む生活環境の改善、雇用や教育機会の増加につながられた。たくさんの部族が、カジノによる収益を、言語教育や伝統文化の復興にも利用してきた。¹⁾ 隣国カナダでも、アメリカほど盛んではないが、いくつかの先住民族の共同体が、経済開発の一環として居留地 (reserve) にカジノを建設し、地域の活性化に役立っている。

¹⁾ Jessica R. Cattelino, *High Stakes: Florida Seminole Gaming and Sovereignty* (Durham and London: Duke University Press, 2008); Duane Champagne, *Social Change and Cultural Continuity among Native Nations* (Lanham, New York, Toronto, Plymouth, UK: AltaMira Press, 2007); Brett D. Fromson, *Hitting the Jackpot: The Inside Story of the Richest Indian Tribe in History* (New York: Grove Press 2003); 鎌田遵『ネイティブ・アメリカン』(岩波書店 2009); 野口久美子『インディアンとカジノ』(筑摩書房 2019)。

北米先住民族の政治経済や文化的変容、共同体の営みとカジノ産業との関わりについては、学問的な蓄積が豊富だ。社会学的なアプローチによって先住民カジノの経済効果を分析した研究や、特定の居留地に焦点を当てて、共同体の経験や変化について検討する事例研究、それ以外にも歴史学の見地から先住民カジノの意義を探るものなどがある。²⁾

カナダ先住民によるカジノ産業への参入に関しては、政治学者が編纂し、歴史家、社会学者、法学研究者など、多彩な執筆陣による論考を収録した学術書は数冊ある。³⁾ しかしながら、カナダの事例に着目した研究は比較的少なく、特に、アメリカの状況との比較の見地からの分析はほとんど行われてこなかった。そこで本稿では、カナダ先住民が直面する様々な課題に言及しながら、先住民の共同体がいかにして居留地でカジノ経営に乗り出し、どのような問題を抱え、経済的なチャンスを創出し、生活環境の改善、及び伝統文化の再生に効果を発揮してきたのかを考察する。現地の新聞記事や統計（主に政府機関発表のもの）、そして現地でのフィールドワークによる知見をもとに、カナダ先住民族とカジノ産業との関わり、および生活環境の変化について、比較の見地から検証してみたい。⁴⁾

²⁾ Jeff Benedict, *Without Reservation: The Making of America's Most Powerful Indian Tribe and Foxwoods the World's Largest Casino* (New York: Harper, 2000); Steven Andrew Light and Kathryn R.L. Kathryn, *Indian Gaming and Tribal Sovereignty: The Casino Compromise* (Lawrence: University Press of Kansas, 2005); Dale W. Mason, *Indian Gaming: Tribal Sovereignty and American Politics* (Norman: University of Oklahoma, 2000); 鎌田遵『ドキュメント アメリカ先住民』(大月書店 2011); 野口久美子『カリフォルニア先住民の歴史: 「見えざる民」から「連邦承認部族」へ』(彩流社 2015); 野口『インディアンとカジノ: アメリカの光と影』(ちくま新書 2019).

³⁾ Yale D. Belanger, ed., *First Nations Gaming in Canada* (Winnipeg, Manitoba: University of Manitoba Press, 2011); Becca Gercken and Julie Pelletier, eds., *Gambling on Authenticity: Gaming, the Noble Savage, and the Not-So-New Indian* (Winnipeg, Manitoba: University of Manitoba Press, 2017).

⁴⁾ 一次資料に関しては、主にカナダ国内で発行された先住民ネーションや先住民の団体の機関誌及びウェブサイト、地元紙、全国紙を参照した。フィールドワークは、筆者がアルバータ大学先住民学部 (University of Alberta, Faculty of Native Studies) に客員研究者として在籍していた、2019年4月から2020年3月の間に行った。この間、先住民ネーションの政府関係者、先住民研究及び教育に携わる先住民にインタビューをした。プライバシー保護の観点から、個別の家庭環境など、プライベートな領域に踏み込んだ内容や、先住民ネーションの政治に関わる情報提供を行ったインフォーマントの氏名については、基本的に表記を控えることにした。引用したインタビューは全て、筆者によるものである。

本稿のために、10人のインフォーマントがインタビューを受けてくれた。インタビューについては、録音した場合もあるが、録音等を好まないインフォーマントもいたため、それぞれインタビュー終了後にフィールド・ノートへの記録作業を行った。インタビューで得た、個人情報及びデータの取り扱いには細心の注意を払っている。これらの全てのデータは、プライバシーの観点から一般には公表しないこととする。

1. カナダの先住民族

2016年にカナダ統計局 (Statistics Canada)の発表では、国内には全人口3,446万0065人の4.9パーセントを占める167万3780人の先住民が住んでいる。その内訳は、ファースト・ネーション (First Nation) 97万7235人、メイティ (Métis) 58万7545人とイヌイト (Inuit) 6万5025人である。⁵⁾

同局が発表した資料では、1996年の全人口に占める先住民の割合は2.8%、2006年は3.8%と増加傾向で、今後20年で250万人を超える見込みであるという。また2016年に、人口3万人以上の都市部に居住する先住民は86万7415人 (51.8%) で、全体の半分以上だった。2006年からの10年間で、都市の先住民人口は59.7%増えた。より良い雇用条件や教育機会を求めて、居留地をあとにする人は少なくない。都市部で先住民が多いのはウィニペグ (Winnipeg) 9万2810人、エドモントン (Edmonton) 7万6205人、バンクーバー (Vancouver) 6万1460人、トロント (Toronto) 4万6315人の順になる。また先住民の割合が高い都市は、サンダー・ベイ (Thunder Bay) 12.7%、ウィニペグ (Winnipeg) 12.2%、サスカトゥーン (Saskatoon) 10.9%だ。⁶⁾

カナダ政府の発表によると、国内には619の先住民のバンド、もしくは634の登録されたグループ、3,371の居留地 (居住者がいないものも含む) が存在する。⁷⁾

一方で、カナダの隣国、アメリカ国内では、2010年度の国勢調査に自身の人種、民族的出自について、先住民のみであると答えた人は293万2248人だった。先住民及び先住民以外の人種も該当すると答えた人の総数は522万579人であり、総人口3億874万5538人に対する割合はそれぞれ0.9パーセント、1.7パーセントとなっている。⁸⁾ また、連邦政府が承認する部族の数は574にのぼる。⁹⁾ 両国を比較してみると、全体ではアメリカが

⁵⁾ “Focus on Geography Series, 2016 Census,” Statistics Canada, last modified April 18, 2019, <https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2016/as-sa/fogs-spg/Facts-CAN-eng.cfm?Lang=Eng&GK=CAN&GC=01&TOPIC=9>; カナダには、ファースト・ネーションやイヌイトと並び、メイティと呼ばれる先住民族が存在する。メイティに関しては一般的に、「ヨーロッパ人とカナダ先住民の混血」と捉えられる傾向がある。しかし、以下に挙げるクリス・アンダーセンの研究が明らかにしたように、メイティもまた、故郷の土地との繋がりを強く有する先住民族の共同体であることを認識する必要がある。ファースト・ネーションも含む先住民族のなかにも、いわゆる「混血」の出自を持つ者がそもそも多く、メイティだけを「混血の先住民」と分類するのは短絡的だ。Chris Andersen, “Métis”: Race, Recognition, and the Struggle for Indigenous Peoplehood (Vancouver: University of British Columbia Press, 2014).

⁶⁾ “Aboriginal Peoples in Canada: Key Results from the 2016 Census,” Statistics Canada, last modified October 25, 2017, 08:30, <https://www150.statcan.gc.ca/n1/daily-quotidien/171025/dq171025a-eng.pdf>.

⁷⁾ “Registered Indian Population by Sex and Residence, 2019,” Government of Canada, last modified November 6, 2020, <https://www.sac-isc.gc.ca/eng/1602251633275/1604843693507>.

⁸⁾ “The American Indian and Alaska Native Population: 2010,” US Census Bureau, last modified January 2012, <https://www.census.gov/history/pdf/c2010br-10.pdf>.

⁹⁾ “Tribal Nations & the United States: An Introduction,” National Congress of American Indians, last modified February 2020, <http://www.ncai.org/about-tribes>.

約9倍の人口を誇るものの、先住民の人口比においては、カナダの方が高いため、カナダ国内の方が、都市部であっても先住民の人たちを見かける機会は圧倒的に多い。

2. カナダ先住民が直面する社会問題

カナダの先住民はアメリカ同様に、ヨーロッパからの入植者の到来以降、セトラー・コロニアリズムの歴史を通じて、虐殺や同化を生き延びてきた。そして、今も彼らの日常は苦難の中にある。まず、カナダ国内全体を見てみると、11%が貧困ライン以下の生活を強いられている。¹⁰⁾ また、5人に1人の子供が、貧困層に属しているという報告もある。ところが、先住民社会に目を向けると、状況はいっそう悲惨で、この数字が一気に跳ね上がる。ファースト・ネーションの居留地に住む先住民の子供の53%、居留地外に住むファースト・ネーションの先住民の子供の41%、25%のイヌイト及び22%のメイティ、32%の先住民の出自を有する子供（連邦政府から承認を受けている先住民の共同体への正式な所属はない）が貧困層に属している。¹¹⁾

居留地の貧困は深刻で、生活環境は概して劣悪だ。例えば、73%のファースト・ネーションの居留地の水道システムは危険な状態にあり、118のコミュニティでは、煮沸しなければ、水道水を飲むことさえできない。¹²⁾ 住居も大幅に不足しており、およそ8万5000軒もの家屋が必要とされており、都市部の住宅事情との格差は大きい。既に確保されている住宅についても、課題が残されている。1996年の時点では、居留地の家屋の36%が大掛かりな修繕を必要としていた。この数字は、10年後には、44%にまで上昇している。同様の家屋に住む先住民ではない人の割合は、わずか7%にとどまっていることを考えれば、居留地の住環境はすぐに改善されなければならないほど、切迫した状況にあることは明らかだ。¹³⁾

また、アメリカと同じようにカナダも、ホームレスに関する重大な問題を抱えている。これまで筆者は、アメリカのロサンゼルススキッド・ロウ (Skid Row) やサンフランシ

¹⁰⁾ “Dimensions of Poverty Hub,” Statistics Canada, last modified September 8, 2020, <https://www.statcan.gc.ca/eng/topics-start/poverty>.

¹¹⁾ “1 in 5 Children Live in Poverty, National Report Card Says,” Christy Somos, CTV News, January 14, 2020, <https://www.ctvnews.ca/canada/1-in-5-children-live-in-poverty-national-report-card-says-1.4766685>.

¹²⁾ Assembly of First Nations, Structural Transformation & Critical Investments in First Nations on the Path to Shared Prosperity, Pre-Budget Submission, 2011, A Submission to the House of Commons Standing Committee on Finance, August 12, 2011, accessed August 29, 2020, <http://www.afn.ca/uploads/files/2011-pre-budget-submission.pdf>.

¹³⁾ The Standing Senate Committee on Aboriginal Peoples, Housing on First Nation Reserves: Challenges and Successes, Interim Report of the Standing Senate Committee on Aboriginal Peoples, Senate Canada, February 2015, accessed by August 29, 2020, <http://www.pubmanitoba.ca/v1/proceedings-decisions/appl-current/pubs/2017%20mh%20gra/amc%20exhibits/amc-15%20-%20senate%20interim%20report.pdf>.

スコのテンドーローイン(Tenderloin)など、ホームレスが多い地域を訪ね歩いてきた。これらの場所では、黒人やラティーノといった有色人種のホームレスをたくさん見かけた。これに対して、カナダにおけるホームレス問題で顕著なのが、先住民の数の多さだ。カナダ全体で、ホームレス・シェルターの利用者の28~34%が先住民であるという。全人口のわずか5%未満が先住民であることを考えると、その割合の高さは群を抜いている。¹⁴⁾

カナダ先住民の現状には、歴史的なトラウマも暗い影を落としている。例えば、1883年から1969年に施行された「インディアン寄宿学校」の制度によって、およそ15万人もの先住民の子供たちが強制的に居留地から引き離され、各地の寄宿学校に送られた。彼らはそこで、先住民の伝統文化や言語を消すための同化教育を受けた。「同化教育」、言い換えれば、文化的ジェノサイドを目的とした寄宿学校は、カナダとアメリカの両国に存在した。そのほとんどが、1990年ごろまでには閉鎖に追い込まれたが、カナダには1996年まで開校していた寄宿学校があった。暴力や虐待をはじめとする悪しき慣習を合法的に行なうシステムが、つい最近まで続いていたのだ。¹⁵⁾

同化政策は、先住民のアイデンティティや存在を否定しただけでなく、彼らに「カナダ人」になることを強要した。人権を蹂躪する苛烈な同化政策は、長期にわたって、先住民の心身を蝕んでいった。歴史的なトラウマは、ホームレス問題をはじめとする、現代の先住民が直面する社会問題に密接に結びついている。

西部の沿岸部バンクーバーと、中西部ウィニペグの先住民のホームレスが集まる地域を訪れた際に、特に目を引いたのが、先住民の家族連れや、単独で行動する子供たちの姿だった。居留地から職を求めて移住した後に、居場所がなくなり、家族全員で家を失ってしまう現実が目に見え込んできた。

ウィニペグ市北部、先住民のホームレスが集まるシェルターの近くの住宅で暮らす、現在求職中のオジブエ族(Ojibwe)の男性(30代)に話を聞いた。彼は、現状をこう説明した。

「都市で生活する親戚を頼って、居留地からやってくる人は多い。しかし、人種差別や偏見があるから、仕事は簡単には見つからない。居候しているから、プライバシーもなく、ストレスがたまって、ちょっとしたことで、諍いが起きて、居にくくなってしまう。だからといって他に頼るところもなく、そのまま居留地から出てきて間もない家族が、ホームレスになるのは珍しいことではない。それで、子供までもが路上生活を余儀なくされる」¹⁶⁾

ましてや、アルコールやドラッグが蔓延している地域でもあり、同居している人の中に依存症の問題を抱えている人がいると、別の家族と一緒に生活することは難しい。

これは大都市に共通している問題になりつつある。西海岸の地方新聞である『バンクーバー・サン』によれば、2017年バンクーバー都市圏(メトロ・バンクーバー)において、先住民の割合はわずか2.5%を占めるに過ぎないものの、同地域のホームレスの実に34%(746人)が先住民だという。2014年のこの割合は28%だったので、悪化の一途を辿って

¹⁴⁾ Stephen Gaetz, Erin Dej, Tim Richter, and Melanie Redman, *The State of Homelessness in Canada 2016*, accessed July 6, 2020, https://homelesshub.ca/sites/default/files/SOHC16_final_20Oct2016.pdf.

¹⁵⁾ Ibid., 51.

¹⁶⁾ Anonymous, interviewed by author, Winnipeg, July 20, 2019.

いることがわかる。¹⁷⁾

ホームレスの支援団体であるカナダ・ホームレス研究所 (The Canadian Observatory of Homeless) によれば、都市部では先住民の15人に1人がホームレス状態を経験している。これは全国的な統計(128人に1人)のおよそ8倍に当たる。またウィニペグやサンダーベイでは50%、北部の中規模の都市、イエローナイフ (Yellowknife) やホワイトホース (Whitehorse) の先住民のホームレス人口は90%にのぼる。¹⁸⁾ 同団体の報告書は、このような惨状の原因について、以下のような説明をしている。

「先住民が抱えるホームレス問題の根元には、歴史的なトラウマ、抑圧、レイシズムと差別がある。先住民のホームレス問題とは、カナダの植民地主義と先住民の土地と人口を搾取してきた歴史の結果であると考慮されるべきだ」¹⁹⁾

歴史的なトラウマは、筆者がインタビューをした多くの先住民から聞いたキーワードのひとつである。それは、何世代にも渡って人々を苦しめ、生活や文化、社会環境に深刻な影響を与えている。

なお、この報告書によれば、先住民を取り巻く問題の背景には、俗に『シックスティーズ・スクープ (Sixties Scoop 60年代の救済)』と呼ばれる、カナダ政府が進めた、先住民の子供を強引に養子縁組して、白人家庭に送り込んだ制度の影響もあるという。同報告では、先住民社会に大打撃を与えた、この制度について次のように説明している。

「さらに、児童福祉の一環で、先住民の子供たちを白人の養父母にあてがったシックスティーズ・スクープは、不安定な家族と家庭環境をもたらした。先住民が直面し、またホームレス問題を生み出している多くの個人的な問題 (家族の機能不全、薬物の乱用、依存症、健康問題、コミュニティの暴力を含む) は、様々な歴史的トラウマと直接的につながっている。構造的な問題には、居留地から都市部への移住、レイシズム、家主からの差別、低いレベルの教育、そして失業も含まれる」²⁰⁾

シックスティーズ・スクープは、1950年代から90年代にかけて行われ、2万2500人以上もの先住民の子供たちがその被害にあった²¹⁾ 筆者は、この政策のもとで、居留地の母子家庭に生まれて、父親がいないという理由で、親族の意思に反して、無理やり白人夫婦のもとに養子にだされたデネ族 (Diné) の女性にインタビューすることができた。

「白人の家庭で、自分が先住民であることを知らされずに育った。十代になって、家族

¹⁷⁾ Cheryl Chan, “Rate of Homeless Aboriginals Hits New Record: Metro Vancouver Homeless Count,” *Vancouver Sun*, September 26, 2017, accessed August 29, 2020, <https://vancouversun.com/news/local-news/rate-of-homeless-aboriginals-hits-new-record-metro-vancouver-homeless-count>.

¹⁸⁾ “Indigenous People,” The Canadian Observatory on Homelessness, accessed August 29, 2020, <https://www.homelesshub.ca/about-homelessness/population-specific/indigenous-peoples>.

¹⁹⁾ Ibid.

²⁰⁾ Ibid.

²¹⁾ “Sixties Scoop Network Launches Innovative Mapping Project for 60s Scoop Survivors,” Amnesty International, June 22, 2020, <https://www.amnesty.ca/news/sixties-scoop-network-launches-innovative-mapping-project-60s-scoop-survivors>.

の中で自分だけが白人ではないことに気づいた。自分は誰なのか。どうして白人の家族とずっといるのか。いつしか精神的に不安定になりがちで、正常な判断ができなくなっていった。外出が増え、夜の街でトラブルに巻き込まれて、自暴自棄になった。それでも、成人してから、同じ境遇の先住民女性との交流をもつことで、徐々に立ち直ることができた。育ての親への感謝はあるが、デネ族の伝統を受け継ぐことができなかつたのは、トラウマとして私の心に残っている」²²⁾

彼女によれば、同じくシックスティーズ・スクープの被害にあった先住民の中には、養父母から酷い虐待を受けてきた人や、事件や事故に巻き込まれて行方不明になってしまった人もいるという。さらに筆者は、エドモントン市内にあるマクユーアン大学(MacEwan University)で、先住民学生へのアドバイザーを務めるクリー族(Cree)のロクサン・トゥートゥーシス(Roxanne Tootoosis)に、寄宿学校制度とシックスティーズ・スクープについての見解を聞いた。

「寄宿学校の目的は、先住民から言語や伝統文化を奪うことだった。暴行や虐待が日常的に起きていて、人間が壊されていった。先住民に職業を身につけさせるという大義名分だったが、計り知れない破壊をもたらした。寄宿学校に連れていかれた先住民が、居留地に帰って、立場が弱い同胞に向けて暴力を振るう事件が後を絶たない。寄宿学校での壮絶な経験を実社会で繰り返してしまう。その制度が問題視されると、今度はシックスティーズ・スクープが始まった。生まれたばかりの赤児を、部族から引き離し、爪先から頭の先まで白人に変えようとした。この国の歴史は、いつも先住民を社会の中から消そうとする暴力の連続だった。これだけ広大な大地があつて、先住民は白人の権利を侵害しようとはしていないのに、どうして白人は先住民にいなくなって欲しいのだろう」²³⁾

虐殺や暴力、寄宿学校やシックスティーズ・スクープ、それらは過去の出来事ではなく、心に残るトラウマとして今日まで引き継がれている。また、こうした政府の政策が、先住民文化を制度的に破壊した影響はあらゆるところに現れてきた。例えば、連邦刑務所に服役する拘留者の24.6%が先住民で、女性に限っては、その割合は35%にまでなる。²⁴⁾ 今も先住民は、差別や偏見、貧困や暴力など、複雑な問題を抱えているのだ。

先述したように、人口比では先住民の割合は4.9%と少なく、都市部や農村部など地域によっては、彼らの存在は見えにくい。ただ、居留地以外の場所であっても、都市部の貧困層の多い地域やホームレスシェルターの周辺では、彼らの姿があきらかに目立つ。

この現状をカジノの誘致によって、どう改善していけるのか。先住民の雇用促進の一環として、居留地にカジノを建設しようとする動きに、注目が集まっている。

22) Anonymous, interviewed by author, Edmonton, May 1, 2019.

23) Roxanne Tootoosis, interviewed by author, Edmonton, July 20, 2019.

24) Gaetz, Dej, Richter, and Redman, *The State of Homelessness in Canada 2016*.

3. カジノの可能性

カナダと同じくアメリカでも、先住民はヨーロッパ出身の入植者と、その子孫によって進められた虐殺や同化教育などの悲惨な歴史をくぐり抜けてきた。冒頭でも述べたように、これまでにアメリカでは、いくつもの部族がカジノを誘致して、雇用の創出と利潤を生み出すことに成功した。そして、その利益は、医療や社会福祉の充実、文化復興や生活環境の向上のために、活かされてきた。²⁵⁾

アメリカ国内の先住民カジノが置かれた現状について、簡単にまとめておきたい。2019年に発表された全国インディアン賭博協会(National Indian Gaming Association)の報告によると、全米で252の部族が488のカジノをはじめとした賭博施設を運営し、324億ドルもの収益をあげている。その収益の一部は240もの先住民コミュニティの再建に利用された。²⁶⁾

例えば、ニューメキシコ州には、24の連邦政府から承認を受けた部族があるが、そのうちの14もの居留地で、カジノが運営されている。²⁷⁾ もともと経済開発の機会に恵まれなかった部族もあり、もしもカジノがなかったら、現在のように居留地の雇用機会が増え、生活が安定していたかどうかはわからない。

カナダでも、1990年代から複数の先住民ネーションがカジノ誘致に乗り出し、経済再生の一手段としてきた。ただ、アメリカに比べると、小規模であるからか、一般的にその現状はあまり知られていない。レスブリッジ大学(University of Lethbridge)政治学部教授、エール・ベランジャー(Yale D. Belanger)によると、ブリティッシュ・コロンビア州、アルバータ州、マニトバ州、オンタリオ州で合計16の営利目的のカジノ(オンタリオ州では、このほかに2つの慈善目的のカジノもある)が先住民ネーションによって運営されている。さらにノバスコシア州には、11の先住民ネーションが経営する、およそ600軒のビデオ・ゲーム賭博場(Video Lottery Terminal)がある。²⁸⁾

カナダ賭博協会の報告をもとに、国全体の賭博産業を見てみると、2017年に国内の賭博産業は、161億ドルもの利益と18万2500件のフルタイムの雇用を創出した。カジノなどの賭博施設内のレストランやホテル、エンターテインメントや物品販売などの売り上げによって、10億ドルの収益があったという。同報告によると、国内には、合計で114ものカジノ(カジノスタイルのものも含む)が運営されていて、6万5000の電子ゲーム機2,000の賭博用のテーブルがある(ニューファンドランド・ラブラドール州を除く)。さらに、

²⁵⁾ Cattelino, High Stakes, 59-94; Champagne, *Social Change and Cultural Continuity among Native Nations*, 180-199; Fromson, *Hitting the Jackpot*, 177-190; 鎌田『ネイティブ・アメリカン』、192-207; 鎌田『ドキュメント アメリカ先住民』、193-222; 野口『インディアンとカジノ』、271-286。

²⁶⁾ National Indian Gaming Association, *2019 Annual Report*, accessed July 6, 2020, <https://online.flippingbook.com/view/317287/>.

²⁷⁾ "Casino," New Mexico Gaming Control Board, accessed July 6, 2020, <https://www.nmgcb.org/casinos.aspx>.

²⁸⁾ Yale Belanger "First Nations Gaming in Canada: Gauging Past and Ongoing Development," *Journal of Law and Social Policy* 30,(2018): 175-184.

ブリティッシュ・コロンビア州とオンタリオ州以外のカナダ全土には、4,680箇所ものビデオ・ゲーム賭博場があり、3万4000台以上ものスロットマシンが設置されている。²⁹⁾

本稿で、主に分析対象とするアルバータ州では、以下の5つの先住民ネーション、アレクシス・ナコタ・スー・ネーション (Alexis Nakota Sioux Nation)、コールド・レーク・ファースト・ネーション (Cold Lake First Nation)、イノック・クリー・ネーション (Enoch Cree Nation)、ストーンニー・ナコダ・ネーション (Stoney Nakoda Nation)、ツー・ツイナ・ネーション (Tsuut'ina Nation) が、カジノ経営に取り組んできた。

州最大の都市、カルガリーの近郊にあるツー・ツイナ・ネーションと第二の都市エドモントン近郊にあるイノック・クリー・ネーションのカジノの規模は、他の3つの居留地と比べて大きい。2009年から2010年の営業年度に、雇用された従業員数を見てみると、イノック・クリー・ネーションは300人（これに加えて、500人のホテル従業員がいる）、ツー・ツイナ・ネーション500人に対して、アレクシス・ナコタ・スー・ネーションは120人、コールド・レーク・ファースト・ネーションは80人、ストーンニー・ナコダ・ネーション30人と少ない。イノック・クリー・ネーションは従業員300人中、先住民が75人、ツー・ツイナ・ネーションは500人中、80人と居留地周辺の雇用促進にも、先住民経営のカジノが貢献していることがわかる。³⁰⁾

4. アメリカ・カナダ両国の先住民カジノ事情

アメリカ、オレゴン州東部に位置するバーンズ・パイユート族 (Burns Paiute Tribe) が所有するオールド・キャンプ・カジノ (Old Camp Casino) のウェブサイトでは、アメリカとカナダの先住民カジノの類似点と相違点を記している。それによれば、両国の先住民カジノには、先住民の土地に建てられ、自分たちの共同体に収益を還元しているという共通点がある。アメリカでは、およそ240の部族が470以上のカジノなどの賭博施設を運営していて、合計で290億ドルの収益を上げるほど規模は大きく、成長が著しい。その一方でカナダでは、先住民カジノの数は18で、その収益の合計は10億ドルほどだ。³¹⁾

アメリカの先住民カジノの繁栄の背景には、一定額以上のギャンブルが合法化されている地域が、ネバダ州やニュージャージー州のアトランティック・シティーなど、ごく一部に限られていることが挙げられる。そのため、先住民居留地でのカジノの需要は大きい。

カリフォルニア州南部の先住民部族の場合、都市圏の消費者に向けて、車で片道5時

²⁹⁾ The Canadian Gaming Association, *The National Economic Benefits of the Canadian Gaming Industry Key Findings Report*, accessed July 6, 2020,

http://canadiangaming.ca/wp-content/uploads/CGA_KeyFindings_document_D.pdf.

³⁰⁾ Yale D. Belanger, Robert J. Williams, and Jennifer N. Arthur, "Casinos and Economic Well-Being: Evaluating the Alberta First Nations' Experience," *The Journal of Gambling Business and Economics* 5, no 1(2011): 23-46.

³¹⁾ "Comparison of USA and Canadian Tribal Casinos," Old Camp Casino, accessed February 6, 2021, <http://oldcampcasino.com/usa-canada-tribal-casinos-compared.html>.

間かけてギャンブルが合法化しているラスベガスに行かなくても、近所の居留地にカジノはあると宣伝し、集客に成功してきた。アメリカ第二の都市、人口1,500万人以上を誇るロサンゼルス都市圏から、車で1時間から2時間の場所では、複数の部族（ペチャング族 (The Pechanga Band of Luiseño Mission Indians) やモロンゴ族 (Morongo Band of Mission Indians) など）がカジノを中心にした、大規模なビジネスを展開している。なかでも巨大なカジノを所有するこの2部族は、豪華で贅沢な雰囲気のもとでギャンブルに興じることができる、と人気を博している。

これらのカジノは、英語のテレビ番組のみならず、スペイン語や中国語、ベトナム語や韓国語などの移民向けのテレビ番組のスポンサーとなり、コマーシャルを頻繁に流し、宣伝にも余念がない。ロサンゼルスにやってくる観光客へのアピールも功を奏し、一大事業に発展してきた。また、ロサンゼルス市内や近郊の高齢者向け介護施設などへの無料のシャトルバスを運行させて、幅広い客層の取り込みに成功している。もはや、この地域の先住民のカジノの競争相手は、別の部族のカジノだ。

これはカリフォルニア州南部に限ったことではない。先に例をあげたニューメキシコ州北部では、観光地として名高いサンタフェから車で1時間圏内に、7つの部族がカジノ経営に乗り出している。この場合も競争相手は、他の部族が所有しているカジノということになる。

一方のカナダでは、州によっても異なるが、先住民ネーションだけでなく州政府や民間企業、慈善団体などが、賭博産業に参入できることになっている。³²⁾ だから、カジノをはじめとする賭博施設がダウンタウンや商業施設の中など、居留地以外の場所にも散見する。

例えば、エドモントンのダウンタウンにはカジノ (Gran Villa Casino Edmonton) があり、施設内には、スロット・マシンが600台、ゲーム用のテーブルは24卓設置されている。³³⁾ このカジノは、エドモントンを本拠地にするプロアイスホッケーチーム、エドモントン・オイラーズ (Edmonton Oilers) のホームリンク、ロジャーズプレイス (Rogers Place) やたくさんの商業施設が隣接するビジネスや観光に適した場所に位置している。カジノとダウンタウンの諸施設は、繁華街の中心に林立し、一つの大きな建物の中にあるようにさえ見える。利用者の多いスタジアムの隣というのは、カジノの立地としては、これ以上は望めないだろう。

また、エドモントンの市中心部から車で西に25分ほどの、遊園地やプール、アイススケート場を併設しているウエスト・エドモントン・モール (West Edmonton Mall) の中にも、カジノ (Straight Casino) がある。曜日と時間にもよるが、昼間から買い物ついでにギャンブルをする客で賑わっている。このカジノには、スロットマシン768台、ゲームテーブル

³²⁾ “Gambling Law in Canada,” Gambling Site Org, accessed August 30, 2020, <https://www.gamblingsites.org/laws/canada/>.

³³⁾ “Gateway Casinos & Entertainment Opens Doors at the New, Spectacular Grand Villa Edmonton in ICE District,” Gateway Casinos & Entertainment Limited, accessed August 29, 2020, <http://www.gatewaycasinos.com/gateway-casinos-entertainment-opens-doors-at-the-new-spectacular-grand-villa-edmonton-in-ice-district/>.

32卓が備えられていて、テーブル・ポーカー用の部屋も8室ある。³⁴⁾

いずれのカジノも、エドモントンに住む人々の、日常的な生活圏内に建てられている。さらに、エドモントン国際空港の近くにもカジノがある。飛行機の乗り換えのために、この街で一夜を明かす人にとっては、わざわざ車で30分以上もかけて市の中心部に行かなくても、賭博を楽しむことができる。それ以外にもエドモントン周辺には、複数のカジノが点在する。この観点から見ても、居留地のカジノは専売制という点において影が薄い。

5. 集客における根本的な課題

カナダとアメリカの先住民カジノについて、アルバータ大学先住民学部で教鞭をとる、ダコタ族(Dakota)のキム・トールベアー(Kim Tallbear)に話を聞いた。³⁵⁾ アメリカ、サウスダコタ州北東部に位置する、レイク・トラバース・インディアン居留地(Lake Traverse Indian Reservation)出身の彼女は、両国の先住民が抱える諸問題を見てきた。

「幼少期を過ごしたアメリカ中西部の平原部は、カナダにも繋がっていて、先住民にとっては、白人が作った国家や国境よりも、先祖から受け継いだ大地との繋がりの方が大きな意味を持つ。北米という括りでアメリカとカナダを見ると、どちらの国の先住民も、セトララー・コロニアリズムの歴史を共有しているものの、その歴史的な歩み、社会状況は異なる点が多い。特に、先住民カジノに関する重大な違いは、国土の広さと人口分布、人口密度などの地理的な条件に起因している」

先述したように、カナダの人口はアメリカと比べると極端に少なく、その差は9倍近い。さらに、カナダの人口の3人に2人(66%)がアメリカ国境から100キロ未満の地域で生活している。³⁶⁾ トロントやモントリオールなどの大都市は、いずれも国境に近いところで発展してきた。

カナダでは、国の南部に人口が集中していて、北部は気候条件も厳しく人口密度が低い。だから、北部の居留地でカジノを誘致しても、集客に限界があることは明らかだ。よほど大きな街、もしくは観光地のそばでカジノを経営しないと一定の収入は見込めない。アメリカの居留地で育ったトールベアーでさえ、カナダでの陸路の旅は、小さな街やガソリンスタンドすらもないような地域を通り過ぎないと、居留地にたどり着けないことがあり、大きなカルチャーショックだったという。

アメリカ国内には、先住民といえば、部族自治権を利用したカジノ運営で大儲けしているというイメージがあるが、もちろんこれは全ての部族のカジノに当てはまるわけではない。例えば、トールベアーの出身部族、ダコタ族が暮らすレイク・トラバース・インディアン居留地のカジノは、ガソリンスタンドに併設されている小規模のものだ。この居留地はサウスダコタ州北東部とノースダコタ州南東部にまたがっていて、隣のミネソタ州の

³⁴⁾ “Straight Casino,” West Edmonton Mall, accessed August 25, 2020, <https://www.wem.ca/directory/stores/starlight-casino>.

³⁵⁾ Kim Tallbear, interviewed by author, Edmonton, September 10, 2019.

³⁶⁾ “Population Size and Growth in Canada: Key Results from the 2016 Census,” last modified February 8, 2017, <https://www150.statcan.gc.ca/n1/daily-quotidien/170208/dq170208a-eng.htm>.

都市、ミネアポリスから、車で約4時間もかかる。

その一方で、同じくダコタ族が住む、プレイリー・アイランド・インディアン居留地 (Prairie Island Indian Community) のカジノは、ミネアポリスから車でおよそ1時間の距離にあり、ホテルも開業して、大繁盛している。カジノ経営は、他の部族のカジノの存在や地理的条件が、極めて重要な要素になる。

アルバータ州の先住民カジノの場合、アメリカのように他の先住民カジノと競争する状況にはなりにくい。その一方で、立地条件が良い民間企業が経営するカジノとの競争関係になる可能性はある。そのような状況にもかかわらず、同州では先住民カジノに設置されたスロットマシンの売り上げのうち、15%を慈善目的に使用し、別の15%をカジノ操業者もしくは提携する企業などに、30%を州内で設立された基金 (Alberta Lottery Fund) に、さらに10%を州内のカジノをもたないファースト・ネーションに分配することになっている。そのため、実際に居留地でカジノを経営しているファースト・ネーションが、自分たちのために利用できる直接的な利益は大幅に減少する。³⁷⁾

収益の一部が他の先住民ネーションや共同体を救う一助となるのは、先住民全体のことを考えると望ましいが、それでも、その割合は少ない。2016年から2017年の間、5つのネーションが経営するカジノがもたらした利益のうち、1億1840万ドルが同州内のカジノを所有しない40のファースト・ネーションに給付された。³⁸⁾ このような観点から見ても、カナダ国内の全ての先住民がカジノで潤うまでには、まだまだ時間はかかる。

ここで、アルバータ州内のファースト・ネーションがカジノ建設のために投資した金額を、先述したベランジャーらの研究で見してみる。イノック・クリー・ネーションが1億7800万ドル、アレクシス・ナコタ・スー・ネーションが5,400万ドル、ツー・ツイナ・ネーションが4,000万ドル、ストーン・ナコタ・ネーションが2,700万ドル、コールド・レーク・ファースト・ネーションは1,100万ドルと数字に大きな違いはあるものの、いずれも多額の資金を投入していることがわかる。莫大な資金をカジノに投資した分、大きな利益をあげなくてはならないのだ。³⁹⁾

トルベアーは、カナダ先住民の共同体による経済開発をめぐる実情についてこう話した。

「カナダの方が、人口の割合からいってもアメリカよりも先住民の存在が可視化されやすい。同時に、経済活動に恵まれず、貧困に喘ぐ部族も多い。結果的に都市部に出なければ、仕事や教育機会がない状況だ。現状を打破しようと、部族内の反対を押し切って、止むを得

³⁷⁾ Belanger, Williams, and Arthur, “Casinos and Economic Well-Bing,” 28; Creezon Lamsees, “The Current State of Indian Gaming in Alberta: Are First Nations Subsidizing the Province?” Yellowhead Institute, last modified, May 22, 2019, <https://yellowheadinstitute.org/2019/05/22/current-state-of-indian-gaming-in-alberta/#>; Robert J. Williams, Yale D. Belanger, and Jennifer N. Arthur, *Gambling in Alberta: History, Current Status and Socioeconomic Impacts*, Alberta Gaming Research Institute, University of Calgary, April 28, 2018, accessed February 7, 2021, <https://prism.ucalgary.ca/bitstream/handle/1880/48495/SEIGA%20FINAL%20REPORT-Apr2.pdf;jsessionid=73975EC9C7C1C67BCE3D08703A3E5595?sequence=3>.

³⁸⁾ Belanger, “First Nations Gaming in Canada,” 176; Solange Jacobs Randolph, “O Canada,” *Global Gaming Magazine*, May 28, 2019, last modified, May 22, 2019, <https://ggbmagazine.com/article/o-canada/>.

³⁹⁾ Belanger, Williams, and Arthur, “Casinos and Economic Well-Bing,” 40.

ず環境に影響を与える資源開発に踏み出す部族もある。カジノだけでなく、様々な側面から居留地の経済を活性化させていかなければ、居留地の過疎化が進み、先祖から受け継いだ大地に留まる人たちの生活は、なおいっそう厳しくなっていく可能性がある」

過酷な貧困を生み出す制度の解体、そして環境問題にも目を向けた居留地の経済開発の多様化が必要だ。

6. 都市に近い先住民ネーションでのカジノ経営

さて、これらのアルバータ州内でカジノ経営に乗り出した5つのネーションのうち、エドモントンのダウンタウンから車で約30分と比較的近い、イノック・クリー・ネーションのリバー・クリー・リゾート・アンド・カジノと、同じく車でおよそ2時間のアレクシス・ナコタ・スー・ネーションにあるイーグル・リバーカジノについて、以下に紹介したい。

イノック・クリー・ネーションの人口は2,223人で、このうちの1,550人が居留地(住宅は290戸)で生活している。⁴⁰⁾ 2006年に開店したこの居留地のカジノは、もともとアメリカのネバダ州に拠点を置く賭博企業パラゴン・ゲーミング社(Paragon Gaming)との共同経営だったが、その後、イノック・クリー・ネーションが単独の所有者になった。⁴¹⁾ カジノには、スロットマシンが1,350台、ゲーム用のテーブルが40卓、イタリアン・レストランやスポーツバー、ハンバーガー・ショップや喫茶店などの店舗もある。⁴²⁾ 敷地内には、249の客室を擁する、この地域では最大規模のホテルが建てられている。⁴³⁾

リバー・クリー・リゾート・アンド・カジノの最新の状況については、新型コロナウイルスの蔓延で、一時的な閉鎖を余儀なくされたことを報じる記事によって、垣間見ることが出来る。エドモントンで先住民向けのラジオ番組を配信しているCFWEラジオのウェブサイトの記事によれば、同カジノは3月半ばから6月半ばまでのおよそ3か月間、コロナ・ウイルスの感染拡大を懸念して、閉鎖されていた。このカジノの1日の一般歳入は約26万ドルで、3ヶ月間の閉鎖での損失額は2,600万ドルにもなったという。⁴⁴⁾

先住民問題専門のニュースチャンネルのインタビューに答えたイノック・クリー・ネー

⁴⁰⁾ “Enoch Cree Nation #440 – Connectivity Profile,” Government of Canada, last modified February 6, 2013, <https://www.aadnc-aandc.gc.ca/eng/1357840941636/1360158465028>.

⁴¹⁾ Shari Narine, “River Cree Casino Fully Enoch-owned Thanks to Cross-border Bond Sales,” *Alberta Sweetgrass* 21(3), 2014, accessed August 24, 2020, <https://www.ammsa.com/publications/alberta-sweetgrass/river-cree-casino-fully-enoch-owned-thanks-cross-border-bond-sales>.

⁴²⁾ “Excitement? Bet on it!” River Cree Resort & Casino, accessed August 29, 2020, <https://www.rivercreeresort.com>.

⁴³⁾ “Stay With Us,” River Cree Resort & Casino, accessed August 29, 2020, <https://www.rivercreeresort.com/stay>.

⁴⁴⁾ “\$26 Million in Lost Revenues at Enoch’s River Cree Casino over three-month COVID Closure,” Sharine Narine, CFWE Radio, June 15, 2020, <http://www.cfweradio.ca/news/alberta-news/26-million-in-lost-revenues-at-enochs-river-cree-casino-over-three-month-covid-closure/>.

ションのチーフ (Chief ネーションの代表)、ビリー・モーリン (Billy Morin) は、900 人 (そのうちの 300 人が先住民で、その約 200 人がイノック・クリー・ネーションのメンバー) の解雇に踏切ったことをあきらかにした。さらに、カジノの閉鎖が続いたために約 230 人の解雇を余儀なくされたという。⁴⁵⁾ 感染症の流行は、ホテルやカジノだけでなく、施設内のレストランや土産物屋の従業員の雇用にも影響を与えた。ただ、逆に言えば、それだけの雇用機会を確保していたことになる。

イノック・クリー・ネーションの政府関係者に、コロナ禍に見舞われる前の 2019 年夏にインタビューをした。彼によれば、もともとネーション内にはカジノ賛成派と反対派がいたが、カジノの経済的効果だけでなく、社会的なプラス面が反対派の数を減少させたという。その成果として彼が挙げたのは、カジノ内のレストランでの食事や会合、施設内に併設されたアイスホッケーリンクで行われる練習や試合の観戦など、賭博以外の娯楽だった。

「カジノでは、クリー族の文化的なイベントも数多く開催されて、その発信の場としても、居留地の社交場としても利用されている。カジノで居留地の雇用が増え、先住民が故郷に留まり、伝統文化を継承しながら、生活することが以前よりも容易になった。居留地の中に雇用があり、経済的に以前より安定したことが、私たちの強い誇りにも繋がる」⁴⁶⁾

彼はカジノの存在が、居留地に暮らす人たちの自己肯定的なアイデンティティの構築にも一役買っていて、大きな影響を与えていることを強調する。エドモントンに近い地理条件を活かし、外から客を呼び寄せ、先住民文化を発信できる場所があることは、共同体には貴重な財産なのだ。

カジノ内にある多目的ホールでは、先住民の文化的なイベントをはじめ、数々の取り組みが行われている。例えば 2019 年には、韓国系アメリカ人のコメディアン、マーガレット・チョー (Margaret Cho) のパフォーマンスが開催された。チケットは完売し、大盛況だったという。

もちろん、カジノでの雇用機会は極めて貴重だ。たしかに、車で 30 分ほどのエドモントン市内で仕事をするのは、それほど難しいことではないと考えられるし、都市の方が職種は豊富だ。だが、朝晩は交通渋滞で、片道 1 時間半かかることもある。冬には、マイナス 30 度を下回り、路面が凍結するので、運転には危険が伴う。四輪駆動車を所有していないと、居留地周辺を走るのは難しい。居留地の中で仕事ができるというのは、尊いことなのだ。

エドモントン近郊に数ある賭博場の中で、何がイノック・ネーションのカジノの集客に役立っているのだろうか。まず、このカジノに一月に数回は通う、先住民 (メイティ) の女性に話を聞いてみると、先住民が経営しているから親近感があるし、居留地に知り合いがいるので、万が一何かトラブルがあったときに安心だ、という答えが返ってきた。金曜

⁴⁵⁾ “Indigenous Owned Casino Closures Costing millions,” Darrell Stranger, APTN News, May 20, 2020, <https://www.aptnnews.ca/national-news/indigenous-owned-casino-closures-costing-millions/>.

⁴⁶⁾ Anonymous, interviewed by author, Edmonton, July 12, 2019.

日の夜に、娯楽を求めて居留地に行くことは、カジノができるまではなかったという。⁴⁷⁾

50代のオジブエ族の女性は、こう話した。

「入口の装飾が市内にある他のカジノよりも豪華で、ホテルや複数のレストランも同じ建物の中にあるので、ラスベガスのカジノにきたような気分になるし、ギャンブルをやらない人でも、お金をかけなくても楽しめるポーカー教室なども開催されていて、余暇を過ごすにはうってつけだという」⁴⁸⁾

確かに、3つのカジノを比較すると、どちらかというダウントウンのカジノは、日本の大型のパチンコ店のイメージに近く、ウエスト・エドモントン・モールのカジノは、賭博よりも買い物のついでに立ち寄る場所といった印象が強い。この2つよりも、「カジノ・リゾートに来た」というイメージが、イノック・クリー・ネーションのカジノにはあるのだろう。

クリー族の40代の女性に話を聞くと、今でも先住民は貧しく、貧困から脱却する術のない哀れな民というステレオタイプが根強く残っていることを主張してから、こう続けた。

「どこの部族もカジノや資源開発などを誘致して、必死に生活を改善するように努めている。カジノは、先住民に限られた資源を活用し、経済開発をして、奮闘しているというアピールだけでなく、この国にはまだ先住民が存在しているというアピールにもなっている」⁴⁹⁾

セトラー・コロニアリズムの歴史を通じて、消去されてきた先住民族の存在、そして日々の営みを可視化していくシンボルとして、カジノは社会的な機能を果たしているのだ。

7. 少し「遠く」にあるカジノ

一方で、都市部から離れたアレクシス・ナコタ・スー・ネーションの人口は1,715で、居留地には198戸の住宅があり、940人が生活している。⁵⁰⁾ この居留地のイーグル・リバー・カジノに置かれたスロットマシンの数は250で、イノック・クリー・ネーションのカジノと比べると規模は小さい。⁵¹⁾

2014年1月14日のCBC Newsによると、2008年にオープンしたアレクシス・ナコタ・スー・ネーションのカジノにも、パラゴン・ゲーミング社が、共同経営という形で携わっていた。しかし、近くに都市がないからか、経営がなかなか安定せず、倒産の危機に直面したこともあった。⁵²⁾ 現在は、アレクシス・ナコタ・スー・ネーションがこのカジノの

⁴⁷⁾ Anonymous, interviewed by author, Edmonton, July 7, 2019.

⁴⁸⁾ Anonymous, interviewed by author, Edmonton, October 29, 2019.

⁴⁹⁾ Anonymous, interviewed by author, Edmonton, August 2, 2019.

⁵⁰⁾ “Alexis Nakota Sioux Nation Connectivity Profile,” Government of Canada, February 6, 2013, <https://www.aadnc-aandc.gc.ca/eng/1357840941623/1360158373841>.

⁵¹⁾ “Gaming,” Eagle River Casino & Resort, accessed August 29, 2020, <https://eaglerivercasino.ca/gaming/>.

⁵²⁾ “Edmonton Eagle River Casino Seeks Bankruptcy Protection,” Charles Rusnell and Jennie Rusnell, CBC News, January 24, 2014, accessed August 29, 2020, <https://www.cbc.ca/news/canada/edmonton/eagle-river-casino-seeks-bankruptcy-protection-1.2509921>.

単独所有者となって、ビジネスの発展に取り組んでいる。⁵³⁾

2019年8月、アレクシス・ナコタ・スー・ネーションの関係者にインタビューを行った。カジノの経営は順調ではあるが、まだ大きな経済効果は生まれていないことを指摘してから、彼はこう話した。⁵⁴⁾

「カジノで雇用は生まれたが、それだけで住民全員の生活が、大幅に改良されたわけではない。居留地の住宅事情やインフラといった生活環境は、まだまだ改善を必要としている状況だ。だから、今でも、雇用や教育機会を求めて、都市部に移住する人が後を絶たない」

このカジノは、居留地の政府庁舎がある地域から車で1時間ほど東に行った、アルバータ州道43号線沿いに建設された。カジノから車で10分ほどのところに、人口約1万人の街、ホワイトコート(Whitecourt)があるが、街の規模としては大きくない。カジノの将来について、アレクシス・ナコタ・スー・ネーションの関係者はこう続けた。

「カジノの経済効果には感謝しているが、大都市から離れているため、客の多くは、近隣の住民や州道を走るトラックドライバー、旅行者などで、集客に限界がある。それでも、これからカジノにホテルを併設して拡張することを、アレクシス・ナコタ・スー・ネーションは計画している。イノック・クリー・ネーションのカジノは、アメリカで成功している一部の先住民カジノに似ている。しかし、それは稀なケースで、カナダでは未だに多くの部族が、居留地の生活を改善するために、カジノ経営に着手したり、資源開発をしたりと試行錯誤している段階だ。アメリカのように目に見える成功にはほど遠い」

全体的に居留地と都市部の距離が大きいカナダでは、雇用や教育の機会が限られていて、カジノ経済効果が、人びとを居留地に留まらせる要因には、まだなっていない部分がある。北部のいくつかの居留地には高校がなく、若者が就学のために、単身で都市に移住しなくてはならない。そこで問題になるのが、文化継承の難しさや、都市部で差別や偏見にさらされることだ。10代の若者がヘイトクライムに巻き込まれるケースも少なくない。

カルガリーとエドモントンというふたつの100万人規模の都市圏を抱えるアルバータ州でさえも、カジノ経営に乗り出したのは45のファースト・ネーションのうち、たった5つだけだ。カナダ全体で見ると、600以上の先住民ネーションがあるのにもかかわらず、実際にカジノ経営に着手しているのは、ほんの一握りに過ぎない。カナダの先住民を取り巻く状況は、カジノの収入だけでは、容易に改善されないほど厳しいものなのだ。

8. 環境保護を見据えた文化の復興

アメリカの先住民カジノと同様に、カナダでもその誘致をきっかけに、生活環境の改善だけでなく、文化の復興につなげていけるのだろうか。多くの共同体がその可能性を探っている一方で、こうした動きに懸念を表する人もいる。

⁵³⁾ Christopher King, "Lucky number 7 - Eagle River Casino Celebrates Milestone Year with Big Plans for Future," *Whitecourt Star*, February 12, 2015, accessed August 29, 2020, <https://www.whitecourtstar.com/2015/02/12/lucky-number-7>.

⁵⁴⁾ Anonymous, interviewed by author, Edmonton, August 2, 2019.

アルバータ大学でクリー語を教えるドロシー・サンダー(Dorothy Thunder)は、国家によって奪われた言語を次の世代に伝承することを軸に、伝統文化の復興を目指している。先祖から受け継いだクリー語は、魂を大地とつなげる言葉であり、この言語を教えることは、学ぶ人の人生に寄り添い、大地とふたたび結びつきかけを作る手伝いをしているようなものだ、と彼女は断言する。⁵⁵⁾

サンダーは、伝統的な価値観から見た、カジノの問題点をこう指摘した。

「カジノのように、客からお金をとって、悔しい思いや敗北感を抱かせて家に返すのは先住民の文化とは無縁で、先祖から継承した大切な大地でやるべきことではない。人をあたたかくもてなすことこそが先住民の文化だ。元来、先住民がカジノでお金を稼いで、それを資本にして文化を復興しなくてはいけないという状況がおかしいのではないか。先住民の伝統文化は、国家によって暴力的に奪われてきた。だから、先住民の努力だけでなく、奪った人たちも誠意を見せて、きちんと補償をして、歩み寄ることで、共生していく道を一緒に探るべきだ」

先住民だけでなく、奪った側も協力をしながら、共に生活環境を守り、助け合いながら社会を作ろうという意見だ。もちろん彼女は、カジノの収益が伝統文化の継承やイベントの開催などに与える経済的な影響には感謝している。ただ、他人から何かを奪う慣習や、自分さえ儲ければ良いという考えや、まわりにいる人や環境を傷つける暴力性が、カジノ産業によって助長されるのではないか、という不安がある。入植者が築いてきたカナダ社会では、自然に感謝する心や、大地との繋がりが希薄になってしまう、と危機感も吐露していた。

また、彼女は多くの居留地で、広大な自然を有効活用して、石油採掘などの資源開発を視野に入れた財源確保が図られようとしていることも問題視する。

「大地は人間が先祖とつながる場所だ。穴を開けたり、傷つけたりすれば、そこに生きる人間の社会もやがては破滅する。先祖の魂が宿る環境なくして、伝統文化の継承は難しい。これまで先祖が守ってきたもの、これから子孫が守るべきものを尊重しながら、自分たちの日常を見つめ直さなくてはならない。必要な分だけ、採集や狩猟で自然界から受け取り、それをきちんと自分たちの暮らしに活かし、共同体の絆を深めながら、そして環境を尊びながら、大地とともに生きるべきだ。すべての生命の営みには、平和で豊かな大地が必要なから」

狩猟部族の伝統文化は、狩に参加した人たちが獲物を分け合っただけでなく、参加しなかった人やその家族、部族の客人や隣人も含めて、地域社会を潤すことに重点を置いてきた。先住民によるカジノ産業や資源開発、文化の復興に関しては、多様な意見があるのだ。

⁵⁵⁾ Dorothy Thunder, interviewed by author, Edmonton, October 16, 2019.

おわりに

1990年代にカナダの先住民ネーションがカジノを誘致してから20年以上が過ぎた。ベランジャーも指摘しているが、課題はあるものの、経済開発の機会に恵まれなかった居留地にとって、カジノの収益が生活を変えてきたのは事実だ。⁵⁶⁾ 全体的な規模はまだ小さく、アメリカの一部の部族のように大きな利益は、あげられていない。ただ、アメリカと同様に、先住民が主権を行使し、イニシアティブを取りながら、その収益の有効な利用方法と部族独自の発展に結びつけていくことには希望がある。同時に、広大な国土において、大都市から離れた地域では、経済開発をカジノだけに委ねることはできない。カナダ政府やと州政府と連携する道を探り、伝統文化を継承するために先住民全体が潤っていきけるような経済活動の新たな一手を打つことが急務ではないだろうか。(文中敬称略)

謝辞：本稿は、亜細亜大学の研究助成プログラム、海外出張（長期）による研究成果の一部である。

⁵⁶⁾ Belanger, Williams, and Arthur, "Casinos and Economic Well-Bing," 41-43.